

学校図書館の発展に向けて海外の IB校ライブラリアンから学んだこと

中田 彩 (水都国際中学校高等学校開設準備室司書教諭)

1 はじめに

2018年、国際バカロレア(IB)校のライブラリアンが講師を務める、二つの研修に参加する機会を得た。両ワークショップ(WS)に参加し、日本と海外の学校図書館及び学校図書館員の役割の違いを再認識することとなった。両研修で学んだ海外IB校の学校図書館の特徴を報告し考察する。事前課題や講師の説明により得た知識だけでなく、参加者と議論から得たものも多い。WS後に、同僚のカナダ人ライブラリアン、外国人教員、WSで出会ったライブラリアン、及び友人らとの議論によって、文化的な違いを理解し考えを整理できたところも多分にある。

2 研修概要

①International School Librarians Forum2018 ワークショップ (全3回)

②International Baccalaureate Professional Development ‘the role of librarian’
Category3

(2018年11月8日~10日、全12セッション)

ワークショップリーダー: Ms. Jeri Hurd (Western Academy of Beijing)

セッションの内訳

Session1: Who we are, what we do, Session2: Libraries and IB, Session3: Library as system, Session4: Library Spaces, Session5: What is an IB Education, Session6: ATL/ATT, Session7: Library Issues/Culminating Project, Session8: Multiliteracies, Session9: Academic integrity, Session10/11: Meaningful conversations, Session12: web (what number are we on?) Smackdown

※あらかじめ IBO から与えられた題目に、参加者の要望も踏まえて、ワークショップリーダーが12のセッションの題目を設定し直している。

開催場所: Western Academy of Beijing (中国北京)

参加者: バカロレア校のインターナショナルスクールまたはバイリンガルスクールで働くライブラリアン24名。内訳は、(3分の1ほど)中国人、(残りの3分の2ほど)アメリカ人、カナダ人、オーストラリア人、インド人、及び日本人(1人、筆者)。

3 日本と海外の図書館の違い

3.1 図書館の定義

IBPDに参加し、筆者の中で図書館という言葉が再定義された。IBPDで事前課題として目を通すように指示された二つの資料を紹介する。TED talkにて(Bill 2016)は「The library is not a place, but a concept ... a verb, not a noun.」(図書館は、ただ空間を表すのではなく、概念…名詞ではなく…動詞である。)と述べている。Ideal libraries(BO 2018)によれば、「Libraries are a “combination of people, places, collections and services that aid and extend teaching and learning.”(図書館は、教えと学びを援助し伸長する複数の要素—人々、場所、コレクション及びサービス—のコンビネーション)と定義されている。

どちらも、ライブラリという言葉が「場としての図書館」を意味するだけでなく、図書館に関わる人々やサービスを含めている。図書館資料の電子化の普及により、これまでの「図書館」が持つ意味や空間による制約を受けない新たな概念が生まれた。自宅、教室、あらゆる場所がライブラリとも言える。

3.2 日本と欧米の学校図書館での教育手法の違い

欧米では、教師と生徒双方向の対話による授業スタイルが一般的だ。小学校段階から、どの教科の授業でも自分の意見を発表する機会がある。学校図書館の資料が量的・質的にもより多く使われるのはIB的、欧米的な教育手法であるのは間違いないと思う。日本の10年ほど前の学校図書館は、概して個人の趣味としての利用に留まり、授業で図書館を使うことはほとんどなかった。しかし、授業での調べ学習が増えた昨今、講義型の授業から主体的対話的な授業に変わりつつあり、図書を使った調べ学習の授業も盛んになってきているように思う。このような背景の比較によって、欧米では日本に比べリサーチスキルが高い傾向があると言えるだろう。

欧米でもPYP (Primary Years Programme; 3-12歳対象で日本の一条校で言えば小学校でプログラムを実施する)校の場合、視力への負担や、電子機器の使い方を習得していないなどの理由で、紙の資料を使うことが多い。それに対してMYP (Middle Years Programme; 11-16歳対象で日本の一条校で言えば中学校でプログラムを実施する)、DP (Diploma Programme; 16-19歳対象で日本の一条校で言えば高等学校でプログラムを実施する)校になると、電子リソース、電子図書を授業で使うことがほとんどであるとのことだった。

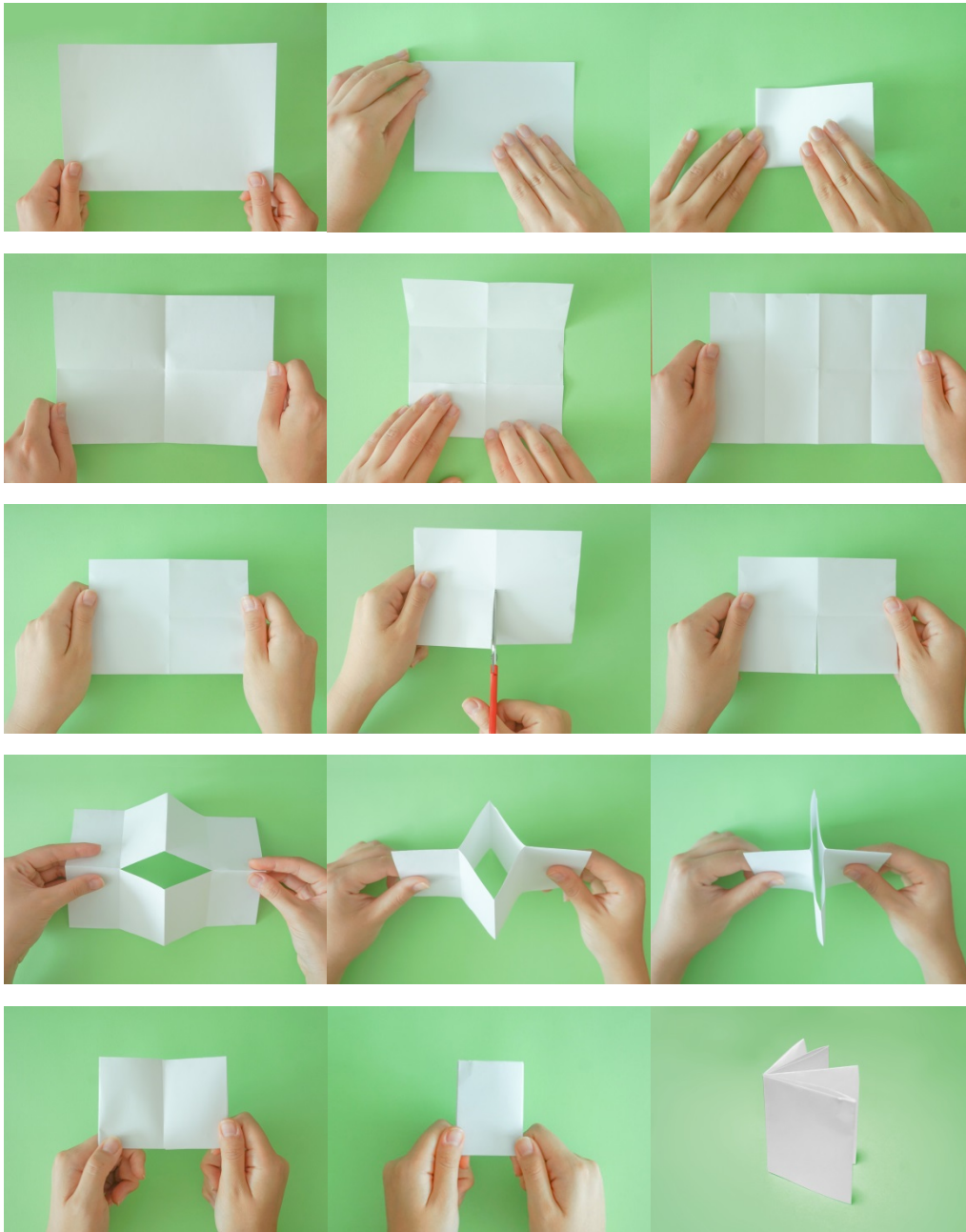
3.3 研修の進め方の特徴、参加者の積極性

IBPDでもISFLにおいても、研修の進め方もワークショップ形式で、多様な活動を通して研修は進められた。特に北京でのWSは、誰もが積極的に取り組んでいた。ほとんどの参加者がお互いに初対面であるにも関わらず、講師への問いかけの後に、自然と参加者の誰かが発言を始める。どのセッションでも自然と会話のキャッチボールが繰り返された。経験年数や年齢に関係なく、自分の言いたいことを言う。一見重要でなさそうな発言から新たな視点を導く事もある。これに比較し日本では、特に若年層に置いて自ら率先して自分の言いたいことを言いにくい場面があることを誰もが感じたことがあるだろう。

参加者同士で話している場面があるだけでなく、個人で考える時間も取られていた。例えば、図書館に関連するキーワードが散りばめられているYouTubeをみて、気になったキーワードを5つ抜き出し、自分の働く図書館のStatementを書く活動があった。30分ほどの時間が与えられた後、再び同じグループで議論した。また、最後のセッションでは、同僚(コーディネーター、管理職など)宛に手紙を書いた。手紙には、WSを通して見えてきた自分の勤務校の課題を解決するために、同僚に協力してもらいたい内容を書く。ある参加者はWS中に管理職にライブラリアンを増やして欲しいという旨のメールを書き、承諾を得るということもあった。

IBPDの初めには、講師紹介の後、参加者同士での自己紹介の時間があった。1人30秒ずつで、名前、出身地、興味のあることなどをペアで紹介し合う活動を繰り返す。5分ほど経った後に、最後に話をした相手の自己紹介を行った。更に、他のWSグループ (IBPDは、同会場で複数のWSが同時に開催されることが多い) と共に、実際に各教科とライブラリをどう結び付けられるか話をした場面もあった。

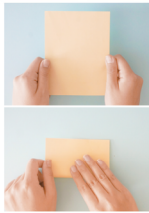
紙を折る作業を伴った活動もあった。IBPD において、参加者は白い紙を1枚ずつ配られた。1枚の紙を半分に折る作業を3回繰り返して、ハサミを入れる。この作業では、結果として見開き8ページの小本が完成する。この様子は写真（豆本の作り方）を参照されたい。（豆本の作り方）



普段ワークショップリーダーが子どもに対して行う活動として紹介された。次のセッションから各自が作成した「小本」にセッションで特に大事だと思われる気づきについて書き込みを促される場面もあった。大人にとっても、これから何をするのか知らされず紙を折っていく作業は、好奇心が掻き立てられ、無意識に、より集中して講師の話に耳を傾けた。こういった活動は、ヤングアダルト世代の子ども達も喜んで取り組む活動とのことであった。同様の活動として、あるカナダ人ライブラリアンも、図書館のイメージを変えるためにできる活動として、折り紙を折りながらストーリーを伝える手法を教えてくれた。ストーリーは彼女の自作のストーリーであり、日本語は筆者の意識である。以下、図（ようこそライブラリ

一へ) を参照されたい。

Step1



Once upon a time / あるところに
There was a girl/ 女の子がいました
And she lived in a box with her family/ 女の子は箱の中に住んでいました
And everything was decided for her/ 女の子のすることは決められていました
and sometimes she did not agree./ でも女の子はそれを嫌だとも思っていました

Step2



Soon she was to be starting a new school./ 女の子の新しい学校での生活が始まります
She imagined it would not be so different./ 女の子はそれまでとそんなに変わらないだろうと思っています
Her old school was not a box exactly but close./ 女の子の前の学校も、箱みたいなものでした

Step3



In her old school there were corridors of classes/ 女の子の前の学校は、教室、廊下があって
where all student sat in row after row./ 生徒たちが整列して、まっすぐに座っている

Step4



After row. /正しく、Just listening./ただ聞いているだけ
And there were notebooks filled line after line with empty words./ ノートには空っぽの言葉が書いてありました

Step5



And in her school there was a library with books-/ その学校には本がある図書館がありました
shelf after shelf. /本棚、そして本棚

Step6



There, the librarian told her to be quiet before she even spoke./ ライブラリアンは、女の子が喋っていないときでさえ、静かにするように言いました
The library was a crypt /図書館は古くて、使われておらず、死んでいました
-old and unused. / All the stacks were empty of people. 誰も本棚に近付こうとはしませんでした

Step7



And the pages of the books were yellow with age/ 図書館の本は色も変わって
and stiff with disuse. / 使われてもいませんでした

Step8



At her school books were chosen for her for homework./ 女の子の学校では、宿題で決められた本を読まなければいけません
The best part about reading was closing the last page /最後のページを閉じたときと
and putting the book away into her backpack./ かばんの中に本を放り込んだときが、一番ホッとする時でした

Step9



She had closed her mind./ 女の子は心を閉じてしていました

Step10



That night the girl dreamed of a cat. / その夜、女の子は猫の夢を見ました
A library cat./ 図書館の猫です

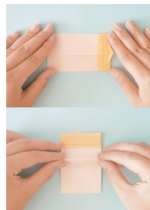
Step11



The cat beckoned the girl to follow-/ 女の子は猫を追いました。/ 彼女の新しい学校の扉を超えて

The cat spat:/ 猫は言います
You no longer live in a box./ もう箱じゃないよ、と
It's time for you to find your own way./ 自分自身の道を見つけるときだよ、と
You have your own compass-follow your own path./ 自分の道を進むための自身のコンパスがあるでしょう？

Step12



And so she did./ 女の子は自分の道を進み始めました

Step 13



The next day she started at her new school/ 次の日、女の子は新しい学校での生活が始まりました
and everything was different. 全てが違ってました/ She passed through doors expecting a library/ 女の子は、図書館への扉を開きました
but instead she found herself in a new place-/ しかし、どこでも別の新しい場所でした
where she could explore and learn on her own/ terms. 女の子が自分の道を切り開き、学べる場所 Where she could be the teacher and the student./ 時には先生になることも生徒になることもある
the pioneer and the innovator./ 新しいことを見つける、創っていく
Where books, games, computers, and information of all flavours/
本、ゲーム、コンピュータ、様々な情報があり、自由を広げられる場所

Step14



But more importantly she discovered a community/
でも、女の子が仲間に出会えたこと、これがもっと大切なこと
where knowledge is available to everyone / みんなが知識を得られるところ
however you need it. / どういう風に知識を得ていくかは、自分次第

Step15



• Welcome to the Knowledge Commons.



図（ようこそライブラリーへ）

3.5 図書館の空間の使われ方

日本の学校図書館では、書架のスペースを減らし、コラボレーティブスペース・アクティブラーニングエリア等と呼ばれる、机と椅子を増やして授業が出来る空間を拡充する動きがあるように感じる。また、学校図書館員は、子どもに課題論文を書くまでの探究活動、即ちリサーチ、論文の書き方指導のカリキュラム作りや授業作りに注力する傾向が現れている。対して欧米の学校図書館は、上記に挙げたようなことはライブラリアンが当然やることだという感覚のようだ。加えて、人に強制されない学びの場所、憩いの空間、心の居場所、コミュニティづくりの場といったことにも比重を置いている場合が多いようである。図書が電子化され、図書館で授業をする必要がなくなってきた点について話が挙げられていた。

図書館所蔵の紙の図書を使う必要に迫られても、教室で生徒が BYOD で図書調べて必要であれば図書館に借りに行けば良い。電子機器が無かった時代に比べて、調べ学習を学校図書館という場で必ずしも行う必要性がなくなってきた。欧米では、場としての図書館を「コミュニティのための憩いの場」と捉えている旨が強いと思う。より自由時間を楽しめる Library program にも重きを置いているようだ。Library Program とは ISFL2 回目の午後に紹介された、Book Reading Contest だったり Book Fair だったりの図書館主催の行事の総称である。

3.6 メーカースペース

Vance氏が横浜インターナショナルスクールに「メーカースペース」を作ったという話があった。日本でもアメリカのSTEAM教育の流れから、メーカースペースは図書館員の間でもトレンドとなっている。



写真（メーカースペース） 左：広州図書館8階 中央：Yokohama International School library内
右：Beijing Western Academy Elementary School 図書館横に Maker Space

インターナショナルスクールにはもともと日本の技術室のような場所がないため、図書館にそうした機能を持たせる、というのは理解しうる。なぜ日本の学校図書館にメーカースペースが必要なのか、図書でないものを取り入れる必要があるのか。ノルウェー人の友人と話していて何と無く自分の中で腑に落ちたのが、メーカースペースの本来の定義は個人のプロジェクト (Personal Project) を進める場所という解釈だそうだ。そして、個人のプロジェクトは、最も能動的にする活動だという。学校に置き換えると、技術室や美術室は授業で使う空間で、授業で規則的に何かを作らされたりするが、メーカースペースは、Personal Project を無目的から始められる場所である。つまり意図せず結果的に創造性を高めて行く場所だそうだ。そして、余暇があるからこそ無目的な空間を楽しめるのであり、創造性を高められるのだ、と。日本の一条校の中高生は他国の中高生に比べて時間割に空き時間が無かったり、放課後にクラブがあったりと自由に図書館を使える時間が少ない。学校図書館にメーカースペースをつくることを考えるときは、子どもの自由な時間をつくることも考えなければならない。著者は、メーカースペースに限らず空間は使用されて価値が生まれると確信していた。しかし、保健室が時に避難場所になるのと同じように「友達と喧嘩をしてしまった」り、勉強でフラストレーションが溜まった時、「リラックスしたい」と思った時に立ち寄れる場所があると良い。その場所の存在を子どもが知っていること自体が子どもをリラックスさせる効果がある。この意見を聞いたときに、メーカースペースも心に安らぎを与える効果もあるのだと感心した。

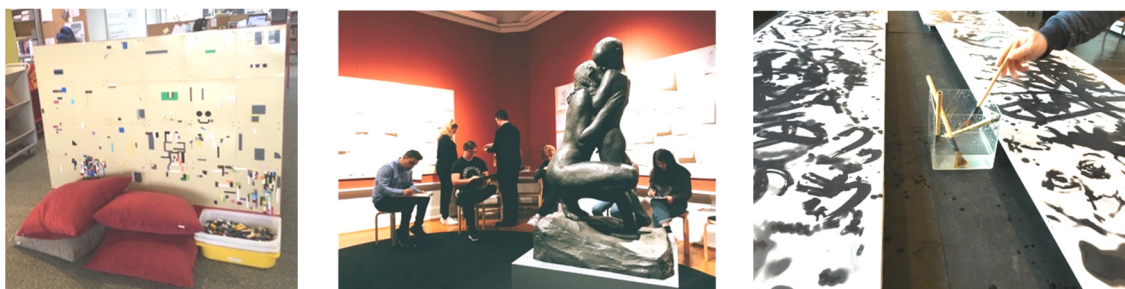


写真 左：Beijing Western Academy High School Library内
中央：National Gallery of Norway（美術展示の部屋と部屋の合間に、来館者も模写ができるスペース）
右：Munch Museum 入り口（自由に習字筆を使って表現できるスペース。大人も子どもも気軽に筆を動かして表現していた）

3.7 電子学校図書館としての Lib-guide

日本で、学校図書館の HP と言えば、所蔵図書の検索画面、ブックリスト、契約データベース等が並んでいる印象がある。欧米のライブラリアンは、個々の図書館が作る、各教科で調べ学習に使える、いわばお役立ちリンク集のことを Lib-guide (リブガイド) と呼ぶ。Lib-guide はある会社が提供しているプラットフォームで、欧米では多くの図書館が使用しているようだ。Lib-guide では、もちろんそのようなライブラリのリソースも項目立てて列挙する。また、全ての教科や学年で取り上げられるトピックごとのリンク集の意味合いもある。ブックリスト、電子リソースのリンク、項目に関連する団体などへのリンクを一括して管理し適宜更新をしていく。パスファインダーや図書リストを教科やテーマごとに作っているものを全て電子で公開したようなものである。今後、日本でも、図書の電子化が進み、リサーチのために子どもが図書館に足を運ばなくてもよくなった時、リブガイドを作れば、強力な媒体になっていくだろう。

3.8 Multiliteracies, Transliteracies

日本の学校図書館員が情報リテラシー、メディアリテラシーとの言葉をよく使う。それに対して、欧米のライブラリアンは、多様なリテラシーの複合体であるマルチリテラシー (Multiliteracies)/トランスリテラシー (Transliteracies) を重視している。IBPD ではトランスリテラシーを、「沢山の種類のリテラシーがある中で、いくつかのリテラシーを組み合わせることで使うリテラシーで、ライブラリで育むべきもの」だと説明された。リテラシーの例を挙げる。Fundamental literacy, Visual literacy, Media literacy, Science literacy, Map literacy, Civics literacy, Health literacy, Numerical literacy, Programming literacy, Game and instructional literacy, Multimodal literacy。スーパーマーケットでお菓子のコーナーはどこで、何が安いかを把握して買うには Sign literacy が使われるとのことである。「ボードゲーム」を置くことも、ゲーム中のコミュニケーションによりマルチリテラシーをつける、という意図で置かれると解釈すると、学校図書館にも取り入れやすいと感じた。

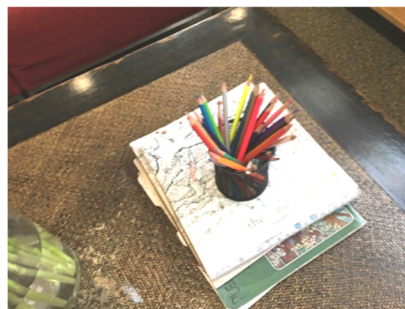
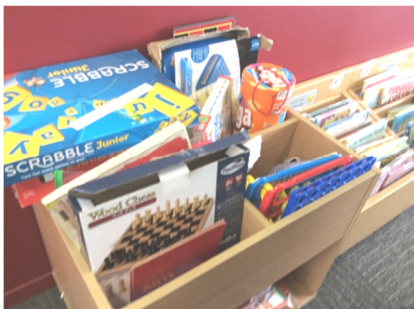


写真 左:Yokohama International School Library
中央: Beijing Western Academy High School Library
右: Beijing Western Academy Middle School Library

4 今後の日本の図書館

4.1 電子図書が増えてきた時の、紙と電子の図書の使い分け

今後、学校図書館向けの日本語電子図書のラインナップも増えていくだろう。紙媒体、電子媒体、どちらで図書を買うか用途によって使い分けをしたい。紙の図書は、読書への親し

み (love of reading) をつけるための図書・文学作品、ブラウジングして気軽に手に取りやすい図書、易しい調べ物の図書、あらゆる分野の基礎的な図書。点字付き図書、匂いつきの図書などを選ぶ。電子図書に関しては、書き込み式の問題集、資格試験の参考書、語学参考書、調べ学習に使う図書全般、さらには映像や音声の入った図書、英語の多読用資料などを購入する。

筆者は今年度、IBDP 認定校をめざす学校開設準備のひとつとして、開校時に図書館に並ぶ紙媒体の図書について考えた。その過程で多くの大型百科事典や大型辞書などの参考図書類の紙媒体が絶版になり電子化されていることがわかった。即ち、新しく出来る学校図書館では、電子データベースに頼らざるを得ないということだ。いっぽうで、図書館に足を運びたいと思える、居心地の良い空間にするには、利用者の年齢やその世代の興味に沿った図書や、易しいレベルの図書から置くことが大事だと考える。そのことを意図して、日本で増えている企業内の図書の置かれているコワーキングスペースやブックカフェにおいてあるような軽い読み物を置くことを意識した。

電子書籍のメリットを大きくするには、全ての生徒が電子図書を閲覧できる媒体が必要であり、ハード面の整備には早晩日本中で整うと思われる。4月に開校され働くことになる学校の場合、生徒1人1台パソコンを持ち授業を受ける環境が整えられる予定である。同じ資料をクラス全員で見ようとした場合、電子書籍の方が使いやすい場合もある。電子書籍にも様々な形態のものがあるが、筆者は、PDF ダウンロード型の電子図書が学校図書館には最適だと感じている。

図書館員の都合をいえば、紙の図書を30~40冊図書館システムに登録するには莫大な時間がかかり除籍する際にも時間がかかる。対して電子図書の場合、PDFで生徒一人一人がダウンロードして使う形は電子書籍に一步足を踏み込んでしまうと、プラットフォームに依存してしまい、そこから抜け出せなくなる。これは紙媒体にはなかった悩みの種になるのかもしれない。しかし学校図書館の資料は保存のためにあるのではなく、使われてこそその価値がある。学校図書館の資料は10年経てば除籍対象になるものも多い。そういう意味で、学校図書館では他の館種に比べて電子書籍を楽観的に捉えられるように感じる。学校図書館の利用者は、デジタル機器に抵抗がなく、むしろ紙媒体よりも電子媒体の方が親しみやすい世代である。学校図書館で供給しきれない図書を、電子で公共図書館や大学図書館等から借りられる時代が来れば、図書館間の連携は自ずと進むだろう。

4.2 デザイナーライブラリアン

Vance氏が研修の中で、いくつかのライブラリアンの archetype (典型) を提示した。IBOも Ideal libraries (2018) で、the teacher librarian, the school or district librarian, the media specialist, the designer librarian, the student life librarian, the super librarian というスクールライブラリアンの種類を示していた。この中でIBPDの中で議論されたのはデザイナーライブラリアンだった。デザイナーライブラリアンとは、図書館として設置された場所のみならず、学校全体の学習環境をデザインしたり、Lib-guide という例に示したような電子図書館を作成したりすると言う意味で使われる言葉だ。空間について考えるに当たり、書架を図書館ではないところに移動させ、図書の利用を促してみたり、壁の色を変えたりすることは、多くの予算を取らずとも出来ることの例として紹介されていた。デザイン性が良いことよりも、そこで何をしようとするかが大事である。良いデザイナーであるためには、種々の考えを理解した方がいい。いろいろな先生、アドミン、沢山のステークホルダー

に聞いてみる機会が多いと良い。それぞれが、学習のスタイルに対して意見を持っているためだ。図書館の中にキャンプ用のテントを貼り、子どもがリラックスして読書できるスペースをつくり、時には折りたたんでそのスペースも有効活用するというユニークなアイデアもあった。Vance 氏も、Exhibition を行う際には書架を壁際に寄せて Mobility (可動性) のある空間を作っていた。また、場所で機能を固定せず、時間帯や使われ方によって機能が変わる空間をつくっていたこともとても勉強になった。

4.3 学校図書館の発展に向けて今の仕事にプラスアルファの時間を作るために

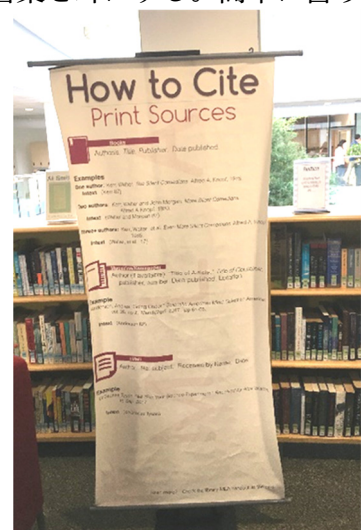
学校図書館の人員、予算には限りがある。電子データベースには、公共・大学図書館向けのものに比べて安価な中学校高等学校向けの価格帯のものも増えてきている。しかし、学校の実情によっては、それでも個々の学校図書館の予算（公立小・中であれば年間各校 40～80 万円、私学ならば年間 50 万～700 万円）を考えると、金額が高いのは否めない。予算の差による情報格差を少しでも縮めるためにはデータベースの学校図書館同士での共同購入を進めていく必要があるだろう。電子化を進めるにあたって障害になっているのは、予算の問題も大きい。生徒数の少ない学校では予算も取りづらい。いくつかの学校でコンソーシアムを組んで契約することも有効だろう。私学であれば、競合とならない地域の学校と協定を結び、共同購入することも可能だ。紙媒体では運ぶのに人手がかかってくるが、電子媒体では一度仕組みを作ってしまうと運用は容易であろう。

一条校でも最近洋書の割合を増やす学校が増えている。IB 校では、日英両言語の資料を図書館に一定量揃えることが求められる。しかし、日本製の図書館システムを使用した場合、英語の MARC を取得することが難しい。大学の総合目録に学校図書館も組み入れる、または学校図書館の総合目録データベースを作るのがよい。図書館員の図書館の登録にかかる作業時間を大幅に減らすことが出来る。

4.4 教育が欧米的な学びに近づくと

どの教科においても自分の意見を小学校段階から書いたり発表したりする場面が増えると、自ずとリサーチで図書館資料を使う場面も増える。資料の引用について、日本は引用の仕方にこだわるが、海外では引用の資料の信頼性、権威性、及び剽窃について学ぶことが多い。

IB では、よく Academic honesty (学術的眞実性) という言葉を耳にする。簡単に言うと、人が言った意見については引用だと示すことと、自分と他人の意見を区別してはっきり書くこと、人に論文を書いてもらわないことだと理解している。日本ではいわゆるコピー論文が問題になるが、他人にアドバイスをもらって論文を書くことが剽窃という意識を持つ者は少ないと思う。例えば「このトピックについてどう思うか」と他者に問うた際に、クラスメイトから聞いた意見に同意するとその意見をあたかも自分の意見であるかのように自分自身のレポートに書く子どももいるだろう。しかし、IB においては、それはやってはいけないこととされる。指導の仕方として、中学生には、「クラスメイトの～さんが言った意見では」と書かせ、高校生になるとクラスメイトが思いつくような議論はそもそも世の中の誰かが文章に書いているはず



だから、同じ意見を書いている人をネット上でリサーチをして探させるというライブラリアンもいた。日本であると、早く出来た子どもが、隣の席の子どもに対して助けてあげることが素晴らしいとされるが、欧米では、手伝えることは、その手伝った子どもの成長を妨げることになり、よしとされないようだ。和を尊ぶ日本と個を尊重する欧米との考え方の違いである。そういった意味で、「Honesty」という言葉のとり方も変わってくるのではないか。

4.5 今後の研修に期待するもの

①学校図書館の対象年齢に合わせた、ライブラリアンのリサーチ能力の底上げ

日本の大学図書館員や公共図書館員が持つようなデータベースの使い方、リサーチの仕方を学校図書館員が知る必要がある。IBDP では、生徒は最終的に Extend Essay と呼ばれる論文を書かなければいけない。IBPD では「Noodle Tools は使っているか」「Citation Management ソフトは何を使っているか」と具体的な電子リソースの話も多く出た。これらの会話の内容は日本では大学図書館員の中でも一部の方が大学生にどう指導を行うか考える際に出てくる会話のように筆者は感じる。予算が少なくても使えるオープンアクセスリソースの活用、データ収集の研修も必要だ。

②英語文献でのリサーチ能力

高校生の進学先として、海外の大学進学を視野に入れる子どもも最近では増えてきていることが理由の1つだ。また、外国人教員とのコラボレーションのための、英語力向上の取り組みも早急に進めていかねばならない課題だ。

③デザイナーライブラリアンとして、図書館員と教科教員またはコーディネーターまたは管理職と共に参加しなければいけない研修

デザイナーライブラリアンとして他の同僚の意見を聞く研修や、教科の専門職の先生のニーズを聞き、コラボレーションを進め、また他の学校の事例を互いに知る機会を持つ。

④ワークショップ形式による参加者の意識改革

つまり、個々がどんな意見や質問でも活発に発表できる環境を創りだすことが最も重要である。真剣に聴く姿勢も必要である。

⑤オンラインラーニングの新設

学校図書館員だけを対象にしたオンライン講座は英語のものは多数見受けられるが、日本では見つけづらい。公共図書館や大学図書館と比べ、図書館員の人数が少ない学校図書館では、子どもが学校にいる時間帯に研修に参加が出来ない。授業利用で使われていない時間帯に職場で研修を受けられるようにすることが大切だ。

5 終わりに

日本と欧米の学校図書館の違いは、図書の電子化の進み具合、また教育方法の違いから来ている。日本の教育は変容期にある。日本の新学習指導要領では、主体的・対話的学びという IB 教育に近い形の教育をめざしている。図書館はこうあるべきだという制約はなく、学校の実態に合わせて図書館は創るべきであると考えている。勤務校では、ライブラリアンでリサーチに関する Webinar を作ろうという話をしている。Webinar とは、反転学習や自主学習、また授業中に使うことも出来る、ウェブ講義のことである。この取り組みに筆者は大いに期待をしている。日本の学校図書館員の誰もが挑戦出来ることだからだ。複雑な職の立ち位置も関係ない。いまやパソコンが置かれていない学校はない。そこでビデオは作成可能だ。学校には教員免許を持たないものが授業することに対してよしと思わない教員も中には

いる。しかし授業中にライブラリアンが作成したビデオを流したり、子どもの電子機器から授業外に視聴してもらう形ならば、実際に授業を子どもの前でしているわけではないので気後れすることもない。専門職であるライブラリアンとして子どもに伝えるべきことを伝える、これも学校図書館員の使命である。学校に限らず、複数のライブラリアンらと協力して作成することも可能である。教員にリンクを送り視聴してもらうことも可能だ。図書委員の子どもたちと作ってもいい。

筆者は中学校は公立校、高校は私立校を卒業した。学校図書館に惹かれ進学した高校で、学校図書館のハード面、ソフト面の差に驚いた。その時から、日本の学校図書館全体がよりよいものになって欲しいとのおもいが消えることがない。私学だから出来ること、管理職の理解があるから出来ること、予算がふんだんにあるから出来ること、そんな壁に日本初の公設民営学校の学校図書館は挑戦する。ライブラリアンとして出来ることは何でもする。日本の学校図書館が、教育の進化と共に能動的になっていく未来をつくる。

Bingqing 氏に対して「未来の図書館はどうなるか。」との質問を試みた。「図書館は決してなくなることはないと信じている。」との答えに勇気付けられた。図書館が人に好かれ、素晴らしい空間を提供する限り学校図書館はなくなると信じている。

引用資料

International Baccalaureate Organization. *Ideal libraries: A guide for schools*, 2018.6.

Ptaeck, Bill. *The library is not a place, it's a concept*, 2016.10.

https://www.youtube.com/watch?v=ES0zGUvZj5s_, (参照 2019-1-31).

Gilbert, Alan. Alan Gilbert Learning Commons fly through, 2013.5.

https://www.youtube.com/watch?v=NN1umMC9PnM_, (参照 2019-1-31).

参考資料

脇田萌佳『国際バカロレア DP 認定校の学校図書館に求められる機能』2017。(筑波大学知識情報・図書館学類に提出された卒業論文)

Origami Kawaii. Origami Paper Electric Light Bulb Instruction, 2016.7.

<https://www.youtube.com/watch?v=416cenuOvcU>, (参照 2019-1-31).